発掘調査の概要

藤原京左京八条三坊の調査（飛鳥藤原第202次）

前号では、発掘調査前半の状況を中世の遺構を中心に報告しました。その後、2020年３月30日まで調査をおこない、新たな知見を得ました。

調査区中央では、南東から北西に流れる自然流路を検出しました。第27-７次調査で確認した大溝の続きとみられます。当初、１本の流路と考えていましたが、調査を進めるうちに２本の流路が重複することがわかってきました。古い流路は弥生時代後期の土器を埋土に含み、幅６ｍ以上、深さ0.4ｍありました。いっぽう新しい流路は、幅3.0ｍ、深さ0.6ｍあります。この流路を藤原京期に埋め立てたのち、その周囲は大規模な整地をおこなっています。

ほかにも古代の遺構として、調査区南部で柱穴列２条を検出しました。柱穴列は建物や塀の一部を構成する可能性があります。しかし、柱穴列の南や東は平安時代以降の洪水により大きく削平されており、柱穴の続きは検出できませんでした。

また、弥生時代の遺構として、自然流路のほかに井戸や土坑、溝を検出しました。特に井戸は素掘りで、径1.1ｍ、深さ0.8ｍあります。井戸の埋土最下層、中層、最上層からは弥生時代後期の完形の長頸壺が１点ずつ出土しました。これらは井戸を埋める際に意図的に置かれた可能性があります。

このように、本調査では弥生時代から中世までの遺構を確認しました。古代以前に調査区内を流れていた自然流路の存在は、現在は調査区より約10ｍ南で北西から西へと向きを変える中の川の旧河道を考える上で参考になります。流路は藤原京期以降埋め立てられ、その後何度か洪水を経験しつつも、この地が中世まで活発に利用されていた状況があきらかになりました。　（都城発掘調査部　石田 由紀子）

調査区全景（南東から）

大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第203次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、大官大寺と山田道にはさまれた地域の実態解明を目的として、継続的な調査をおこなっています。昨年度は２月から３月にかけて、大官大寺南限から南へ約25ｍの地点で試掘調査をおこないました。調査面積は120㎡です。また、試掘調査地南方では約10,000㎡を対象に地中レーダー探査をおこないました。

調査の結果、７世紀後半以降とみられる整地土層をはさんで、上層では南北溝２条、下層では７世紀前半の東西溝１条とそれに沿う柱穴列等を確認しました。

上層の南北溝２条は、藤原京東四坊坊間路の東西両側溝の可能性がありますが、溝の大きさや埋土の堆積状況がそれぞれ異なっており、さらなる検討が必要です。

一方、下層の東西溝は調査区内では南肩を確認したのみですが、幅2.2ｍ以上、深さ約0.5ｍで、断面は逆台形です。この溝からは土師器、須恵器等がまとまって出土しており、概ね７世紀前半に位置づけられます。また、ウリ種実等の植物遺存体、燃えさし等が出土しています。これらは東西溝の南肩付近から集中的に出土することから、南方から投棄された生活廃棄物と考えられます。

今回、大官大寺南方に藤原京の条坊が施工されていたかどうかの確証は得られませんでした。しかし、７世紀後半以降の複数回の整地土層を確認することができたことにくわえ、７世紀前半の遺構の存在があきらかになったことは、当地域の土地利用の歴史を考える上で大きな成果といえます。

今後もさらに南の地域で試掘調査、地中レーダー探査を実施し、７世紀前半の遺跡の広がりや、それ以降の整地の年代や条坊施工の有無を解明していく予定です。　（都城発掘調査部　片山 健太郎）

下層東西溝と柱穴列（北東から）